



# 女性の活躍推進に必要な わたしの かかりつけ医

国立成育医療研究センター  
妊娠と薬情報センター 母性内科外来 兼務  
医学博士

## 後藤 美賀子



<後藤 美賀子> プロフィール  
国立成育医療研究センター・妊娠と薬情報センター  
母性内科外来の兼務。  
日本リウマチ学会専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本医師会認定産業医、医学博士。



妊娠と薬情報センター (国立成育医療研究センター)  
TEL <https://www.ncchd.go.jp/kusuri/>  
03-5494-7845  
FAX 157-0074  
東京都世田谷区大蔵2丁目10-1

妊娠と薬情報センターは妊娠・授乳中の服薬に関する情報機関です。専門の医師・薬剤師があなたの相談に応じます。

2005年、厚生労働省の事業として、妊娠・授乳中の服薬に関する情報機関が設置されました。それが国立成育医療研究センター内にある「妊娠と薬情報センター」です。そこに勤務する後藤美賀子先生にセンターについて、また同センターにある母性内科について伺いました。

### 妊娠と薬情報センターとは

「妊娠に気づいていないときに薬を飲んでいたが、妊娠を継続しているのか」「慢性疾患をもっており薬を飲んでいますが、妊娠したい」など妊娠・授乳中の服薬に関する情報機関が妊娠と薬情報セ

ンターです。

妊娠と薬情報センターの拠点病院は現在、47都道府県に整いまして、一県に一カ所はあります。

薬が市販される前には治験で薬の安全性が確認されますが、妊娠・授乳中の女性は治験の対象には多くの場合ならず、妊娠・授乳中の薬の安全性のデータはないのが一般的です。そこで妊娠と薬情報センターでは、世界中で報告されている妊娠・授乳中に服薬した情報を集め、内容を確認してデータベースにしています。センターを利用された女性の協力を得て、薬が妊娠・授乳に及ぼす影響を調

査しており、その後の出生児の情報も含めてデータベースに蓄積しています。  
相談が来る度に都度、情報を調べており、最新の情報を提供できるよう努力しています。相談は毎月200件程度はあります。相談者はセンターのHPから問診票を用意していただき、ご自分で記入してセンターに必要な書類を郵送していただきます。問診票が到着しましたら医療スタッフが相談方法を検討します。センターより「相談方法のお知らせ」をお送りしますので、それに従って、電話、妊娠と薬外来、または主治医のもとで相談を受けていただきます。

一人で悩まずにどんどん活用していただきたいですね。

### 添付文書内の禁忌をかえる

妊娠中は何よりも母体の状態が安定していることが一番なのですが、妊娠すると薬を中止するとい

に取り組みました。臓器移植を受けた方は免疫抑制剤を飲まなければ拒絶反応が起きることもありまので、服薬を止められませんか。現場の医療関係者は長らく悩んできたわけです。今回三つの免疫抑制剤が妊婦さんに使用可能になり、一番は患者さんのためですが、我々医療関係者にとりましても朗報です。

### 女性に寄り添う母性内科

10年くらい前になりますが、膠原病の患者さんを担当していたとき、「病気がよくなったら妊娠したい」との相談を受けました。慢性の病気がある方の妊娠について調べてみると意外と情報が無い、調べることが難しい、ということに愕然としましたね。そんな時、現在妊娠と薬情報センターのセンター長である村島先生の「慢性疾患をもつ方の服薬と妊娠」についてご講演を聞く機会がありました。また、そこで母性内科についても知

りました。

母性内科とは、慢性疾患をもつ女性が妊娠をしたい場合や、妊娠合併症に悩まれた場合にきていただく女性のための内科です。内科の先生は、患者さんの妊娠が発覚すると産婦人科の先生に頼るようになります。患者さんは、今までの先生に自分の病気は診てほしいですが妊婦となると逃げ腰になります。産科の先生からすると内科の病気は内科医にみてもらいたいですよね。患者さんが迷子になることも少なくありません。妊娠中でも継続して診療できる母性内科がもつと増えるといいなと思っています。以前は慢性疾患を持つ方はあまり妊娠を考えることはありませんでした。今は医療も進み妊娠を希望する患者さんが増えています。私が診察していたリウマチの患者さんが妊娠を強く希望されてきました。その方に処方していた薬に2018年夏に禁忌が解除された薬が入っていました。添

付文書では禁忌でしたが、使用した報告は複数あり、問題ないことも報告されていた事を何度も説明し、納得してもらい、妊娠中も薬を飲み、そして無事出産しました。妊娠中にはこういうことが起こるかもしれない、データが悪くなったり、もし痛みが出ても必ず対処するから大丈夫、と情報をお伝えし安心していただくことも大切です。リウマチの方は、産後に手などの負担も多くなりますので、あちこちが痛くなる不安があります。産後も相談しながら一緒にやって行きましょう！と伝えるようにしています。

数年前から病気は落ち着いていたけれども、主治医と妊娠について相談する機会を逸していたために、気づくと妊娠しにくい年齢になっていったという患者さんが少なくないことも気になっています。女性の慢性疾患を診る医師に対する啓発も行なっていきたく考えています。

う例が多くみられます。「妊婦には使えません」と薬の添付文書に書かれていると、専門家がデータ的に見て「妊娠中の使用を可能」と思っても使いづらいものです。使すべき人に使えない、大切な妊婦さんに使えない、そんな状況を放置しておくわけにはいきませんので、添付文書の見直しをするという事業を厚生労働省から正式に承りました。2年間の検討の末、昨年三つの免疫抑制剤の妊婦への使用が認められました。見直したい薬はたくさんあるのですが、現場のニーズに合わせて一番に免疫抑制剤